原　著

金大医保紀要 Vol. 23 No. 1
33～38　1999

助産婦の役割に対する女性の認識と期待

島田　啓子　　坂井　明美　　亀田　幸枝
田淵　紀子　　炭谷みどり　　笹川　寿之

要　旨

北陸地方に居住する女性96名を対象に，助産婦の役割に関する認識と期待について質問紙調査を行った。調査対象の50%以上が，助産婦が行っている業務であると認識していたのは，「妊婦の健康教育」，「母親学級」，「出産管理」，「乳房の管理」，「新生児の世話」，「育児指導」であった。逆に50%以上の女性が，助産婦は行っていないと認識していたのは，「幼児の性教育」であった。

また助産婦に期待する役割として，対象の50%以上が回答した項目は，「妊娠の診断」，「妊婦の健診」，「母親学級」，「妊婦の健康教育」，「出産の管理」，「乳房の管理」，「育児指導」，「新生児の世話」，「産後の性・避妊指導」，「母児の家庭訪問」，「1カ月時の母児健診」，「乳幼児の育児指導」，「学童，思春期，未婚者，更年期および老年期の性教育」，「家族計画指導」，「更年期の健康相談」であった。

また各項目ごとの回答は，認識より期待感のほうが高い傾向にあった。したがって，こうした女性たちのニーズに応えられる資質と能力・活動が助産婦に求められている。

KEY WORDS

Role of Midweife, Women, Recognition, Expectation

はじめに

助産婦に求められる役割は，社会のニーズと専門職であることの責務から規定される。現在の高齢社会や女性の結婚年令および出産年令の上昇，それに付随した出生率の低下，さらにセクシャリティーの多様化は直接的・間接的に助産婦業務と深い関連性をもつ。時代のニーズに応え，助産婦に求められる能力や資質を検討するために，女性たちはどのように助産婦の仕事を認識し，どのような役割を期待しているのだろうか。1993年に日本看護協会が行った実態調査では，褥婦の約90%以上が助産婦はお産の介助者と理解し，助産婦の業務の範囲についても，妊娠・分娩周辺の行為にとどまっていると報告している[1]。これに関して，ICM (International Confederation of Midwifery) は，一般の人々に助産婦の活動に対する理解を促し，イメージを高めることを提言している。これまで，褥婦からみた助産婦に対する調査[2]や助産婦自身が考える助産婦職の専門性や活動について報告されたものはあるが[1),3)]，一般の女性を対象とした報告はあまり多くない。そこでケアの受け手である女性からみた助産婦の役割に関する認識や期待を明らかにする必要がある[3]。助産婦が女性のライフステージ全般において well being を提供できるために，最も助産婦と関わる機会が多い成人女性に焦点をあて検討した。

方　法

1．対　象

対象は1997年に北陸地方に居住していた女性115名である。対象の選択にあたって，看護系学生の知人を通して便宜的に選択し，調査の目的を説明して協力が得られた96名（83.5%）を分析対象にした。

2．調査方法

日本看護協会の助産婦活動と看護白書[4]を参考にして，計20項目になる選択式質問を今回の調査のために作成した。調査は無記名，自己記入式で設問のそれぞれに，「助産婦が行っている業務と考えるか否か」と「助産婦に期待する業務か否か」の二側面から回答を依頼した。この回答は3段階に分かれ，1．行っている（期待の項目では，してほしい：以

金沢大学医学部保健学科看護学専攻

下同じ)，2．わからない（わからない)，3．行っていない（する必要がない）とした。従って，得点が低いほど，助産婦が行っていると認識されている。また期待に関しても得点が低いほど，助産婦に期待している業務内容と解釈できる。

3．分析方法

Macintosh. Statview Ver. 5.0を使用した。属性別によるカテゴリー間の差の検定は，2群の場合はMann-whitneyのU検定を，3群以上の場合には，Kruskal-Wallisの検定を行った。有意差は危険率P＜0.05とした。また関係性はPearson's偏相関係数を求めてFisher's検定を行なった。

結　果

1．対象の属性

対象の年齢は，17～63歳までの中央値33歳±13.1，歪度0.351で左寄り（若年令）の分布を示した。表1に示したように，年令層別では20代と40代が多く全体の52.1%を占めた。婚姻別にみると既婚者は56名で58.3%，未婚者は40名で41.7%であった。出産経験の有無別では，経験がある者54名で56.3%，経験のない者が42名で43.8%であった。さらに，助産婦との関わりの有無別にみると，これまでに助産婦と接したことのある者は43名で44.8%，ない者は53名で55.2%であった。

表1　対象の属性

	人(n=96)	(%)
年齢		
10代	16	16.7
20代	27	28.1
30代	17	17.7
40代	23	24.0
50代以上	13	13.5
既婚の有無		
既婚	56	58.3
未婚	40	41.7
出産経験		
あり	54	56.3
なし	42	43.8
助産婦との関わり		
あり	43	44.8
なし	53	55.2

2．助産婦業務に対する認識と期待

図1に示したように，各設問項目に対して女性の50%以上が“助産婦が行っている仕事である”と回答した項目は，「出産管理」(90%)，「乳房の管理」(70%)，「新生児の世話」(67%)，「育児指導」(63%)，「妊婦の健康教育」(61%)，「母親学級」(51%）の順に高かった。これらの項目はいずれも周産期に行うケアと指導に関する項目が主であった。逆に周産期のケアや指導項目の中で，回答した女性が50%以下であった項目は，「母児の家庭訪問」(27%)，「妊娠の診断」(28%)，「1カ月時の母児健診」(43%)，「妊婦の健診」(44%)，「産後の性・避妊指導」(49%）であった。また全項目についてみると，女性からみて“助産婦は行っていない”と認識していた項目は，「幼児の性教育」(52%)，「思春期の性教育」(48%)，「老年期の性指導」(47%)，「学童の性教育」(46%）の順に高くみられ，周産期の対象を除いたライフステージの性に関する指導や教育が主であった。ただし，性に関する指導の中でも「産後の性・避妊指導」を除いて40%以上の女性は“わからない”と回答していた。一方，助産婦に期待する項目をみると「幼児の性教育」を除くすべてにおいて，50%以上の女性が，助産婦に期待すると回答していた。反対に，50%以上の女性が“わからない”と回答した項目は「幼児の性教育」(53%）であった。また，どの項目においても“する必要がない”と答えた女性はいなかった。

3．属性別にみた助産婦業務に対する認職

各項目に対する属性別による違いを分析した。顕著に差がみられたのは「乳房の管理」で10代を除いて，各年代の60%以上の女性は，助産婦が行っている業務として認識していた。また表2に示したように，「乳房の管理」では年令層が高くなるにつれて認識度も高く（r＝0.408，P＜0.001)，未婚者よりも既婚者の方が認識が高く（P＜0.01)，出産経験のない女性よりも，ある女性の方が認識が高いことを認めた（P＜0.01)。さらに助産婦と関わりのない女性よりも，関わりのあった女性の方が助産婦が行っている業務と認識していた（P＜0.01)。「乳房の管理」以外の項目では，助産婦と関わりのない女性に比べて，関わりのあった女性の方が「母親学級」(P＜0.05)，「育児指導」(P＜0.01)，「産後の性・避妊指導」(P＜0.01)，「母児の家庭訪問」(P＜0.05)，「1カ月時の母児健診」(P＜0.01）の5項目について，助産婦が行っている業務と認識しており，有意な差を認めた。また，これらの項目では未婚者

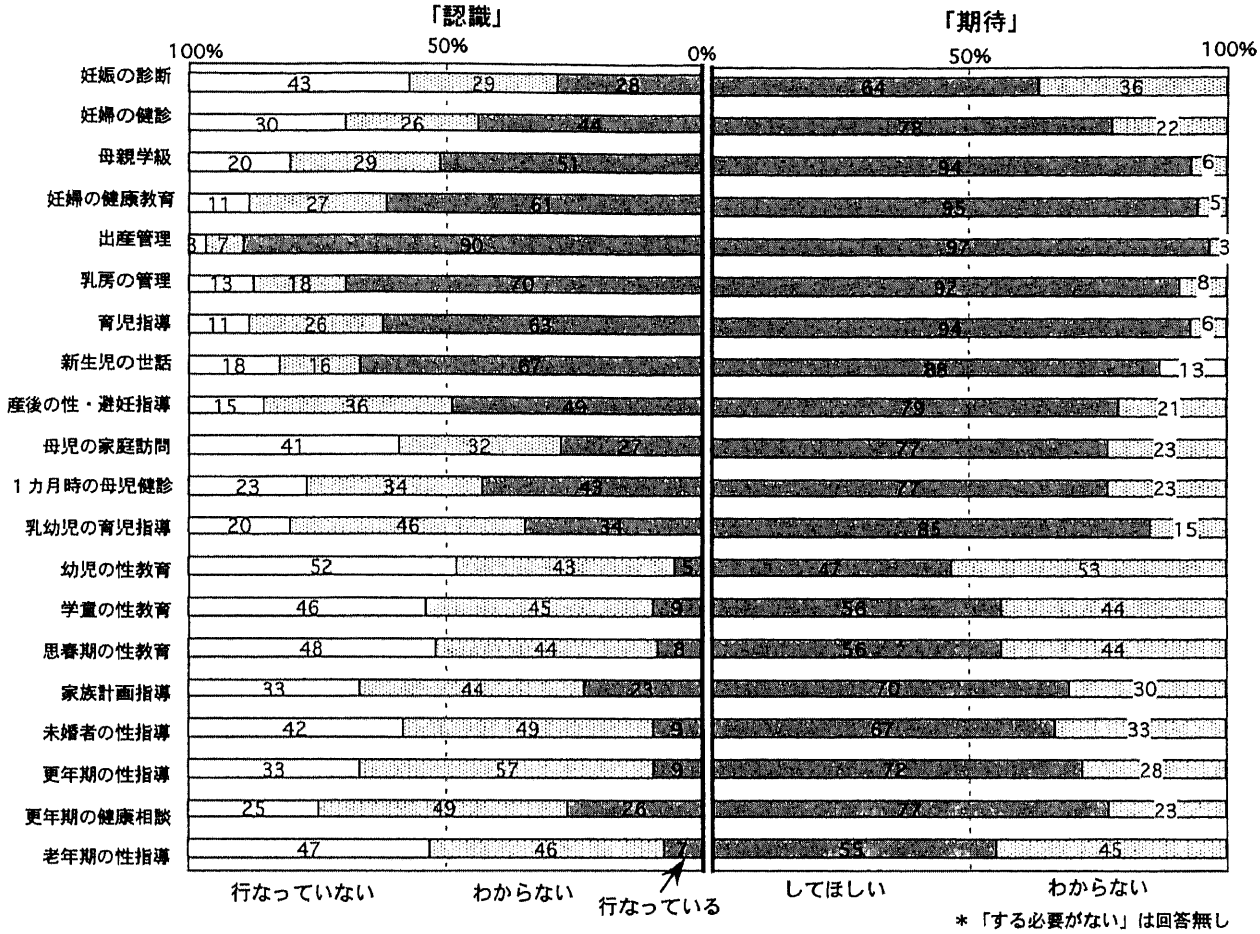

図1　助産婦業務に対する認識と期待

表2　属性別にみた助産婦に対する認識

各カテゴリーの回答得点の平均値の比較

N=96, mean±SD

項目	年齢					婚姻		出産経験		助産婦との関わり	
	10代	20代	30代	40代	50代以上	既婚	未婚	あり	なし	あり	なし
	n=16	n=27	n=17	n=23	n=13	n=56	n=40	n=54	n=42	n=43	n=53
乳房の管理	2.1±0.8	1.4±0.6	1.3±0.6	1.1±0.5	1.2±0.6	1.2±0.5	1.8±0.8	1.1±0.5	1.8±0.8	1.1±0.3	1.7±0.8
母親学級	1.8±0.8	1.6±0.7	1.6±0.8	1.6±0.8	2.0±0.9	1.7±0.8	1.7±0.7	1.7±0.8	1.7±0.7	1.5±0.8	1.9±0.7
育児指導	1.7±0.8	1.5±0.7	1.5±0.6	1.3±0.6	1.5±0.8	1.4±0.7	1.6±0.7	1.4±0.7	1.6±0.7	1.3±0.6	1.7±0.7
産後の性・避妊指導	1.9±0.7	1.7±0.7	1.6±0.7	1.5±0.7	1.7±0.9	1.6±0.8	1.7±0.6	1.6±0.8	1.7±0.6	1.4±0.7	1.8±0.7
母児の家庭訪問	2.4±0.7	2.1±0.8	2.2±0.5	1.8±0.9	2.2±0.9	2.0±0.8	2.3±0.8	2.0±0.9	2.3±0.7	1.9±0.9	2.3±0.7
1カ月時の母児健診	2.0±0.8	2.0±0.8	2.1±0.7	1.5±0.7	1.5±0.8	1.7±0.8	2.0±0.8	1.7±0.8	2.0±0.7	1.6±0.8	2.0±0.7

表３　属性別にみた助産婦に対する期待

各カテゴリーの回答得点の平均値の比較　　N=96,　mean±SD

項目	年齢					婚姻		出産経験		助産婦との関わり	
	10代	20代	30代	40代	50代以上	既婚	未婚	あり	なし	あり	なし
	n=16	n=27	n=17	n=23	n=13	n=56	n=40	n=54	n=42	n=43	n=53
母児の家庭訪問	1.5±0.1	1.3±0.5	1.2±0.4	1.1±0.3	1.1±0.3	1.1±0.3	1.4±0.5	1.1±0.3	1.4±0.5	1.1±0.3	1.4±0.5
学童の性教育	1.6±0.5	1.6±0.5	1.2±0.4	1.4±0.5	1.3±0.5	1.3±0.5	1.6±0.5	1.3±0.5	1.5±0.5	1.3±0.5	1.5±0.5

上記項目は有意差を認めたもの　　* p<0.05　**p<0.01

よりも既婚者の方が，出産経験のない女性よりもある女性の方に認識が高い傾向がみられた。

４．属性別にみた助産婦に対する期待

表３に示したように助産婦に期待する役割として，有意な差がみられたのは２項目であった。その一つは「母児の家庭訪問」で，未婚者よりも既婚者の方が，そして出産経験のない女性よりも出産経験者の方が助産婦に行って欲しいと期待していた（P＜0.01)。更に，同項目で助産婦と関わりのなかった女性よりも，関わりのある女性の方が有意に助産婦に期待していた（P＜0.01)。２つ目は「学童の性教育」で，未婚者よりも既婚者（P＜0.05)，出産経験のない女性よりも出産経験者（P＜0.05)，助産婦と関わりのなかった女性よりも，関わりがある女性の方が助産婦に期待していた（P＜0.05)。他に「幼児の性教育」,「思春期の性教育」,「更年期の性指導」の３項目では，未婚者よりも既婚者，出産経験のない女性よりも出産経験者，更に助産婦と関わりのない女性よりも，関わりのある女性の方が期待が高い傾向がみられたが，いずれも有意な差ではなかった。

一方，年代別では「学童の性教育」,「思春期の性教育」は，30代の女性に期待が高くみられ，「更年期の性指導」は，40代の女性に助産婦への期待が高い傾向にあった。

考　察

今回の調査で，女性が助産婦が行っている仕事と認識していたのは，施設内で実際に助産婦が行っている周産期のケアや指導であることが確認された。また，属性別にみた結果からは，既婚者や出産経験者，あるいは助産婦と関わりのあった女性の方が助産婦の業務に対する認識が高い傾向がみられた。このことは，女性が妊娠・出産・育児という経験を通して助産婦が行う仕事だと理解し，認識しているということを示唆している。しかし，「妊娠の診断」,「妊婦の健診」,「１カ月時の母児健診」の項目については助産婦の仕事と認識されていなかった。これは，施設内で助産婦が主体的に行っていないという事実[1]を反映する結果といえる。また，全国助産婦教育協議会[5]で検討された助産婦の活動マニュアルに「性に関する助産婦業務」が盛り込まれている。この性に関する助産婦の仕事に対して，女性の40％以上“がわからない”と回答した。これは，看護系の教育課程で助産婦教育が保健婦教育や看護婦教育より，はるかに多くの性と生殖に関する専門教育を行っていることから考えれば，その助産婦職に対する女性の職業理解は乏しく浸透されていないことが示唆された。岸田ら[7]の報告にあるように，助産婦が思春期の援助に関われない理由として，“関わる場がない”ことが大きな要因の一つであり，こうした場の開発と確保に向けて，地域の保健システムに参画する活動をはじめとして，助産婦が活用されるような一般の人々へのアプローチも積極的に検討される必要がある。

一方で，助産婦に期待されているのは，周産期前後のケアや指導はもとより，幼児期を除く各ライフステージにおける性に関する指導であった。「母親学級」,「妊婦の健康教育」,「出産管理」,「乳房の管理」,「育児指導」,「新生児の世話」の項目に関して，50％以上の女性が，助産婦が行っていると認識していたのに加えて，期待感は更にそれを上回っており，

認識と期待が一致（認識と期待のいずれも50%以上の回答があるもの）していた。また，認識は50%以下であったが期待は50%以上を示した項目に，「妊娠の診断」，「妊婦の健診」，「産後の性・避妊指導」，「母児の家庭訪問」，「１カ月時の母児健診」，「乳幼児の育児指導」，「学童の性教育」，「思春期の性教育」，「家族計画指導」，「未婚者の性指導」，「更年期の性指導」，「更年期の健康相談」，「老年期の性指導」があげられた。以上の結果は，助産婦の役割に関して，周産期の対象に関わるケアだけでなく，その前後のライフステージ各期においても，性に関する健康相談や指導が望まれており，女性の期待が高いことが推察された。思春期の性教育に関する報告でも，林[8]は，高校生は女性のカウンセラーを望んでいると述べている。このようなケアの受け手の心理を考慮するなら，女性であり性に関する専門的知識を修得した助産婦は十分スーパーバイザーとなりうる能力がある[7),9)]。また，30代の女性に学童や思春期の性教育に対して助産婦への期待が高いこと，40代の女性に更年期の性指導への期待が高い傾向がみられたことから，対象のライフステージとその家族構成を考慮した関わりが求められていると考える。今日の施設内に就業する助産婦が圧倒的に多い状況では，周産期を中心に助産婦が活動していると認識され易いことは理解できる。これまでの結果を踏まえるなら，ライフステージ各期の性に関する健康相談や教育活動も助産婦の重要な役割であることを再認識する必要がある[10),11)]。本調査の結果は，助産婦職の自律と研鑽が求められることを，ケアの受け手である女性たちの期待から示唆されるものであった。

但し，本調査の結果は，対象の選択が北陸地方に限られ，構成人数に偏りがあること，そして対象者が看護系学生の知人や周辺の者であることから，回答に歪みが生じている可能性があることを考慮に入れておく必要がある。今回の結果をもとに，助産婦の存在の積極的なアプローチと健康相談や指導の場の確保と地域に浸透する取り組みが今後の課題として残された。

結　論

1）「助産婦が行っている業務である」と，50%以上の女性が認識している項目は，「妊婦の健康教育」，「母親学級」，「出産管理」，「乳房の管理」，「新生児の世話」，「育児指導」であり，逆に「幼児の性教育」は，50%以上の女性が，「助産婦が行っていない」と認識していた。

2）女性の50%以上が期待する助産婦業務の内容は，「妊娠の診断」，「妊婦の健診」，「母親学級」，「妊婦の健康教育」，「出産管理」，「乳房の管理」，「育児指導」，「新生児の世話」，「産後の性・避妊指導」，「母児の家庭訪問」，「１カ月時の母児健診」，「乳幼児の育児指導」，「学童の性教育」，「思春期の性教育」，「家族計画指導」，「未婚者の性指導」，「更年期の性指導」，「更年期の健康相談」，「老年期の性指導」であった。

引用文献

1）日本看護協会出版会：助産婦の役割に関する調査－病院に勤務する助産婦自身が評価した助産婦の仕事，日本看護協会調査報告書，40，13－22，1993.

2）日本看護協会出版会：お産に関するアンケート調査－褥婦から見た助産婦，日本看護協会調査報告書，40，36－43，1993.

3）久保田君枝　他：「助産婦の専門性と役割」についての意識調査，助産婦雑誌，52(2)，158－163，1998.

4）Tinkler, A., Quinney, D.: Team midwifery : the influence of the midwifery-women relationship on women's experiences and perceptions of maternity care, Journal of advanced nursing, 28(1), 30-35, 1998.

5）日本看護協会出版会：看護白書，78－80，1971.

6）平澤美恵子，全国助産婦教育協議会編集：助産婦のための地域母子保健活動マニュアル，６－70，1997.

7）岸田　泰子　他：思春期の性に関する援助のあり方（第２報）－助産婦に期待される役割－，思春期学，13(3)，214－219，1995.

8）林謙治：学校保健における性教育と地域の連携，周産期医学，20(5)，701－703，1990.

9）平澤美恵子：日本の助産婦が持つべき実践能力と責任範囲，日本助産学会誌，12(2)，75－84，1991.

10) Cohen, S. S.: Williams, D. R.: Managed care reproductive health, Journal of nurse midwifery, 43(3), 150-161, 1998.

11) Pashey, G.: Professional issues. Management and leadership in midwifery: part 1, British journal of midwifery, 6(7), 460-464, 1998.

Recognition and expectation of the women for role of midwife

Keiko Shimada, Akemi Sakai, Yukie Kameda
Noriko Tabuchi, Midori Sumitani, Toshiyuki Sasagawa

ABSTRACT

We investigated the recognition and expectation for the midwife working by the questionnaire from 96 adult women who lived in Hokuriku region. More than 50% women recognized the following items; Healthy education of a pregnant women, a prenatal class, management of birth, management of the breast feeding, care of a newborn baby and education of the child care, as midwife working. Inversely, more than 50% women didn't recognize sex education of infancy as midwife working. On the other hand, more than 50% women expected for midwife working about a diagnosis of pregnancy, medical examination of a pregnant woman, prenatal class, health education of a pregnant women, management of birth, management of the breast feeding, education of the child care, care of a newborn baby, education of the sexuality and contraception after childbirth, home visit of the mother and newborn baby, examination of mother and child for one month, child care advice of babies and young children, sex education of the elementary child, adolescent, single women, menopause women and elderly women, family planning advice and health consultation the menopause. The each item of expectation tended to be higher than that of recognition. Therefore, it is necessary that midwives should have nature, ability and activity, which could be responded to the needs of women.